

演題 12. 臨床検査技師による外来採血の工夫
とその実態について

○田口敏 鶴岡成一 稲田豊 佐藤美智 里村秀行 麻
生裕康（千葉県がんセンター）

【目的】当センターではH17年から臨床検査技師
全員による外来採血業務を開始し、外来化学療法
室の効率的運用を目的に、本年度より早朝8時か
らの採血も導入した。様々な工夫により安全性の
確保、待ち時間短縮、アメニティー向上をはかり
院内における技師採血が定着したので、その実態
について報告する。

【対象・方法】1日の業務開始時から終了時まで
30分ごとの採血患者数ならびに曜日別の採血数を
調べた。また、採血手順・採血器具の適正使用や
合併症・事故についても実態を調査した。

【結果・考察】外来採血者数はH17年37,784件
H18年39,980件であった。H19年はさらに増加
傾向にある。曜日別では火・木曜が多く、200件
を超える。1日のうちでは午前8時半から10時半
頃にピークが見られ、全体の4分の3が午前中に
集中する。一方、患者相は高齢者が多いことに加
え化学療法により血管が堅く、あるいは、細くな
り、さらには浮腫によって血管が全く触れないな
ど採血困難な場合も少なくないが、翼状針の採用
ならびに温浴や保温剤による手指加温によって難
しい患者の採血も可能になった。また、手背採血
の割合は採血患者の3%程度であり、3回以上の
穿刺回数は2%未満であった。H16年以前に最大
60分程度あった待ち時間は、技師採血へ移行後は
待機患者数に応じて担当技師以外の技師が自主参
加することで、5分前後となり最大でも15分程度
と短縮された。血管迷走神経反応（VVR）例は
H17年5件、H18年4件発生したが採血室に看護
師が不在のため、重症VVR発生時やその他の緊
急時に備え、院内緊急放送（EMR）とともに緊
急時の対応が今後の課題である。

連絡先：043-264-5431